2025年7月13日（日）主日朝礼拝説教

『**わたしはある**』井上隆晶牧師
出エジプト記3章1～10、13～14節、ヨハネによる福音書8章53～58節

❶【**燃え尽きない柴**】
今日はモーセの召命のお話をします。エジプトから逃亡したモーセは、シナイ半島の先にあるミディアン地方まで逃げ、そこで祭司エトロの娘と結婚して家庭を作り、羊飼いをしていました。エジプトを出てから 40 年が経ち、年齢はすでに 80 歳になっていました。（使徒 7：23、30）ある日、羊の群れを荒れ野の奥に追ってゆき、神の山ホレブまで来ました。すると燃えているのに燃え尽きない柴を見つけます。神がその柴の炎の中に現れたからです。この個所はいろいろと解釈されてきました。柴はこの世の朽ちるものを象徴し、火は神を象徴していますから、子なる神イエス・キリストが神性を保たれたまま、朽ちる人間の肉体を取られたのに、神が入った肉体は燃え尽きなかったことのひな型であるとか、マリアが神を宿したのに、マリアの肉体は燃え尽きなかったことのひな型とも言われました。今日の週報の表紙のイコンがそうです。

●上智大学のリーゼンフーバーという教授が「**内的集中と外的解放**」ということを言っています。「内的集中」とは、自分の内に起こってくるさまざまな思いを見つめ、黙想するといった意味です。「外的解放」とは、「内的集中」によって蓄積されたエネルギーを外へ向かって解放する、分かりやすく言えば行動するということです。**豊かな人生を送ってゆくためには、どうしてもこの二つのバランスが必要だというのです。**

私たちは毎日忙しく働き回っています。でも「外的解放」ばかりを続けていると、必ず燃え尽きてしまいます。燃え尽き（バーン・アウト）の最も大きな原因は、働きすぎというよりはむしろ「内的集中」の時間をとっていないことから来るといわれています。

●神学校の時の教会史の岩本助成牧師はいつも授業中、輝いていました。福音を語っているとき、神学しているときその目が喜びにあふれていました。神と語ったモーセの顔が光り輝いていたようでした。「**モーセは、山から下った時、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。**」（出エジプト 34：30）「**主を仰ぎ見る人は光と輝き、辱めに顔を伏せることはない。**」（詩編 34：5）

朽ちる柴とは、あなたのことです。でもあなたの中にキリストまたは聖霊が宿るなら、あなた燃え尽きることがなく、神によって燃やされる者になるでしょう。燃え尽きないためにも、どうしても神との交わり、祈りが必要なのです。神の力と命をいただいて活動する者となりましょう。

❷【神の名前】

「**どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう**」(3節) と言って、モーセは道をそれて、その柴を見に行きました。「**道をそれて**」と二回書かれていますが、本当は40年間それた道を歩いていたのであって、本道に戻ったと言うべきでしょう。(go over には宗旨替えをするという意味もある) すると、神の声が聞こえてきました。「**モーセよ、モーセよ、ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。**」(5節) 履物を脱ぐのは、奴隷のしるしです。聖なる土地というのは、ここも神様が支配している場所だということです。モーセはエジプトから遠く離れた地で、40年間も羊飼いの生活をしてきました。同胞のヘブライ人のこと、先祖の神のことも遠い過去の話になっていたと思います。しかし、逃げても逃げても神から逃げきることなどできないのです。モーセが逃げてきたこのミディアンの地も神が支配している場所なのです。あなたは私の僕であり、私の手の中にいるのだぞと神は言われるのです。
神はモーセに命じます。「**今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。**」(10節) モーセは神の名前を尋ねます。すると神はモーセに「**わたしはある。わたしはあるという者だ。**」(14 節)「**これこそ、とこしえに私の名。これこそ、世々にわたしの呼び名。**」(15節) と答えられます。口語訳だと「**わたしは、有って有る者**」です。神だけが本当に存在している方という意味です。他の神々は存在していません。人間が作り出したイメージです。でもこれは名前ではありません。神のご性質です。
旧約聖書で神の名前を尋ねた人が他に二人います。有名なのはヤコブとサムソンの父マノアです。「**どうか、あなたの名前を教えてください。とヤコブが尋ねると、『どうしてわたしの名を尋ねるのか』と言って、ヤコブをその場で祝福した。**」(創世記 32：23)「**お名前は何とおっしゃいますか。あなたをおもてなししたいのです。…主のみ使いは『なぜ、わたしの名を尋ねるのか、それは不思議という』と答えた。**」(士師 13：16～18) 神はこの二人にも名前を言いませんでした。神が名前を隠されるのは、神は知りつくせないからです。存在を超えた方には、名前はつけられません。神は、他の何物からも生まれず、造られず、他者に全く依存していません。神は時間と場所、環境などの条件に縛られない方です。

この「**わたしはある**」という名前を使われたのが、イエス様です。「**はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から『わたしはある。』**」(ヨハネ 8：58)、「**『わたしはある』ということを信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。**」(ヨハネ8：24、28) 神だけが使う名前をイエス様は使われました。だからユダヤ人が腹を立てたのです。ここからモーセに現れたのは、イエス様だったことが分かります。教会はイエス様の頭の後ろに十字架を書き、その中にこの「**わたしはある**」という言葉の頭文字「ό、ώ、ν」を入れることによって、キリストは神であることを表したのです。隠れていた神は、今イエス・キリストという姿で現れたのです。

❸【痛みを覚える神】

しかし、わたしがここで感動するのが次の個所です。

・「**わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降ってゆき、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、…へ彼らを導き上る。**」（7～8節）
・「**わたしはあなたたちを顧み、…あなたたちを苦しみのエジプトから、…乳と蜜の流れる土地へ導き上ろうと決心した。**」（16～17節）

北森嘉蔵という神学者が「神の痛みの神学」という本を書きました。神は高い天からただ地上を見下ろしているだけでなく、人間の痛みを感じられる方であるというのです。苦しむ人と一緒にいると、自分も辛くなります。それが続けば鬱状態になります。だから目を反らします。しかし神は、苦しむ者、叫ぶ者から目を反らさず、その苦しみをつぶさに見ているのです。「**その痛みを知った**」とあります。聖書で「知る」というのは体験を意味します。神も共に苦しんで痛んでいたのです。その神が天から降って、人間を救おうと決心したのです。神の決心です。人間の決心とは比べ物になりません。だから、人は必ず救われます。神が救うまでやめないからです。それはイエス・キリストの十字架として現れました。

●ノーマン・ピールというアメリカの牧師は、どしゃぶりの雨の中に教会に向かう時にこう言いました。「**ああ嫌だ、嫌だ、こんな天気じゃ、まともな人なら誰も礼拝になんか来ないよ。きっと誰もいない教会で説教しなきゃならなくなるんだ。ああ嫌だ、嫌だ**」。そんな牧師が奥さんに叱られて二人で祈るのです。

真の問題は、私たちの不信仰にあります。一人で勝手にあきらめてしまい、祈ることもしません。祈らないということは、人に絶望しているのではなく、実は神に絶望していることなのです。人の救いは人間の力で何とかなるものではありません。人を救おうという思いは、人間より神の方が強いのです。あの方は熱心です。何度でもやるでしょう。**この世の人はすべてを神抜きで考えますが、キリスト教徒である私たちは人生のすべての事に神を入れましょう。神を入れるとは、希望を入れるということです。キリストが共にいれば必ず善に変わるでしょう。**自分に期待するのではなく、他人に期待するのでもなく、どんな時も神キリストに期待しましょう。